

発行 「試論」英文学研究会
〒980-8576 仙台市青葉区川内
東北大学大学院文学研究科 英文学研究室
Tel & Fax 022-217-5961
E-mail : Deleted to prevent spam
Website: <http://charles.sal.tohoku.ac.jp>

No. 4

March 2001

第40集原稿締切の延長について

『試論』第40集の原稿締切日は2001年2月末日でしたが、本日(3月1日)現在まだ一本も原稿が届いておりません。

現在執筆中の方が3名おられますが、締切の延長をせざるをえない状況となっております。とりあえず執筆中の方々には五月連休明け頃をめどに提出していただくようお願いいたします。また、3篇ではまだ少ないので、他の会員の方々にも是非ご投稿をお願いいたします。ご執筆いただけるのであれば、締切日について再度考慮させていただきます。

『試論』では、掲載論文の水準を維持するために厳正な審査を行っておりますが、投稿された論文については基本的に掲載の方向で努力することになっております。未熟な大学院生の論文でも書き直し、再提出のプロセスを経ることによって掲載に耐える内容になっています。また、論文の内容については、英米文学・文化の幅広い分野にわたるものを期待しております。どうかふるってご投稿くださいますようお願い申し上げます。

カラー図版・特殊フォント

昨年発行の第39集にはフルカラーの図版が掲載されました。『試論』のような英文学関係の学術誌としては画期的なことと思われます。当初はカラーコピーなどの安価な方法も考えましたが、耐久性などの点で問題があり、執筆者の強いご希望もあって、通常の色分版方式を採用しました。コスト的にはモノクロ印刷より3~4万円増となりましたが、大変きれいな仕上がりになりました。このような場合、超過分を執筆者に負担していただく場合があると投稿規定に明記されています。しかしながら、これまでモノクロ図版の場合には執筆者に負担を求めた例はありません。今回はカラー図版ですが、執筆者には費用の半額程度をご負担いただくことにいたしました。

また、別な論文ではOEやMEのテキストで使用される特殊な文字(3とp)が使用されています。これはアメリカのLinguists Software社の高解像度用フォント(Laser Saxon)を購入して印刷しました。フォントの場合には本研究会の資産となります。また、執筆者が学生であることも考慮し、負担は求めないことにしました。

2000 年度決算報告

前回決算報告以後の決算を以下の通りご報告申し上げます。

前年度繰越金	1,557,377
封筒その他文具	3,404
Newsletter 3 印刷代	1,600
Newsletter 3 送料	6,080
編集委員宛論文送付郵送料	1,170
編集委員旅費（1名）	3,000
LaserSaxon font	13,797
英文校訂料	20,000
カラー図版個人負担分	+15,000
第 39 集発送費	33,650
第 39 集印刷費	280,350
印刷費振込手数料	315
前回決算報告以後の 会費振込額（振替口座残高）	+691,230
+ の付いている分は収入です	
次年度繰越金	1,900,241

2000 年 3 月 1 日現在

会費の値下げ・会則改正について（提案）


上の決算報告のように、本研究会の累積黒字は間もなく 200 万円に達しようとしています。現在のところ適切な黒字消化方法が見あたりませんので、とりあえず会費を値下げさせていただくことを提案いたします。

具体的には年会費を 6,000 円として、さらに大学院生会員は年会費 3,000 円とすることといたしたいと思います。会費の納入が順調であり、会員数が現状のままであれば、この金額でも累積黒字を食いつぶすことなく『試論』を刊行することは可能と見込んでおります。

会費については本研究会会則の改正が必要です。会則改正には会員の過半数の賛成が必要とされていますが、今回は会費の「値下げ」という改正でありますので、会員による投票をわざわざ行うまでもないと思われれます。つきましては、第 40 集をお届けするまでに多くのご反対がなければ、過半数のご賛成を得たものとみなし、会則第 10 条を次のように改正して、第 40 集分から新会費でのご納入をお願いすることといたしたいと思います。

会則改正案 第 10 条 本会の会費は別に定める金額とする。

「試論」英文学研究会 会長 原 英一



まともな英文学者、まともな英語教師

原 英一

第40集は原稿がなかなか集まらず、締切延長のやむなきに至りましたが、このようなことは『試論』に限ったことではありません。私は一昨年から日本英文学会『英文学研究』の編集委員になっておりますが、ここでも原稿の集まりがよくない状態が顕著になりつつあります。特に新人賞の応募の減少は著しいものがあります。1999年度は5篇、2000年度は4篇の応募しかありませんでした。幸いにも授賞論文、佳作論文が出たので、少ないなりに質の高いものがあつたこととなります。それにしても10数篇の応募があるのが当たり前だった数年前とは大きな様変わりです。

編集委員会では原因をいろいろ探求しました。「最近の若い人は他人から評価されることをきらう(傷つきたくない)のではないかと」「応募しても佳作以下だと選評で酷評しかされないから」、「そもそも賞などに関心がない(野心がない)」、「賞金が少なすぎる」など、意見はさまざまに出ましたが、どれも決定的ではないようです。新人賞のみならず、一般投稿も減少しているので、問題の根はもっと深いのではないのでしょうか。日本英文学会の國重前会長もニュースレターで危機感を表明されていました。

私としては、このような現象は、英文学研究を取り巻く環境が厳しさを増していることにあるのではないかと考えております。具体的には英文学研究者の研究機関(大学)におけるポストの質的变化です。かつては大部分の研究者は英文科とか英語科に所属し、英語の授業を担当しながら、自由に心ゆくまで自分の研究を行うことができました。しかし、今では比較文化とか国際文化とか、あるいは文化交流(コミュニケーション)など、意味不明の名称の組織に所属し、しかも学問の実体などとも希薄なそれらの名称にふさわしい業績を要求される状況となっています。正統的な英文学研究をやっている余裕がないというのが中堅の研究者の実状ではないのでしょうか。私の所属しているところも文化科学専攻の西洋文化学講座なのだそうで、担当し

ている授業も「英語文化論」となっています。非常勤で出講している他大学の英文科です。すでに何年も前から「比較文化論」を担当し、今年からは「異文化コミュニケーション」を講義することになっています。

一方、若い研究者たちにとっては、この状況は極度の就職難となつて、深刻な問題となっています。昨年のある英文学関係学会のプログラムを見たら、何と研究発表者全員が大学院生でした。就職のためにできるだけ業績をあげようという彼らの必死の思いが背後に感じられて、何とも複雑な気分でした。もはや「英文学」の公募ポストなどほとんどありません。きまじめに英文学の研究を志す若者には熾烈な競争が待ち受けています。厳しい競争は研究者の質を高めるのですから、むしろ歓迎すべきだという見方もありえます。ところが、彼らにとつて耐え難いのは、実際には英語の授業を担当するにもかかわらず、大学レベルの英文解釈を自分一人では満足にこなせないような人たちが、かつての英語教官ポストを次々に占めるようになってきていることです。英語を専門としない、なにやら怪しげな領域の「専門家」たちが、英語教師・研究者志望の優秀な若者たちから職場を奪い、語学の授業の教室では受験英語で鍛えられた学生たちから嘲笑され、彼らの勉強意欲を喪失させているのです。(しばらく前、私の研究室にある一年次学生が相談にやってきました。彼は米国に長期留学の経験があり、聴解、読解、作文のすべての面で非常に高い語学力を持っていたのですが、「(某先生の授業で)毎時間、間違つた英語を教えられるのですが、試験で正しい答えを書いたら落第になってしまうのでしょうか」と深刻に悩んでいました。)これでは公正な競争とはとても言えません。

中堅も若手もこのような状況に置かれている中では、英文学の論文がなかなか集まらないとしても不思議はありません。しかし、このような時代であるからこそ、まともな英文学研究を背景としたまともな英語教師の存在はますます重要になっています。

現在のような大学語学教育の荒廃に対する反動も少しずつ感じられるようになってきました。大学生の学力低下も深刻な問題ではありますが、一流の学生が多く集まる大学は今でもあり、たとえ少数でもこれからも存続続けるでしょうから、そうした場所で初歩的な英語の間違いを日常的に繰り返す三流語学教師の存在がそういつまでも許されるはずもありません。(前出の学生は「人間だから誰でも間違いはあります、ときどき間違うというだけなら許せますが、毎回となると・・・」と書いていました。この他にも、語学教員として適格性を欠く者たちがいかに深刻な問題を引き起こしているか、最近私自身が直接経験する機会もありましたが、それが何であるかは社会的影響が大きすぎてとても書くことはできません。もっとも英語・英米文学の専門家である会員の皆様には容易に推測できることでしょう。)毎日大量の英語文献と

格闘している熱意ある大学院生には、「いつの日か君たちの時代が来るはずだ」と言って励ましています。しかし、将来はともかくとしても目先の就職先の展望はなかなか開けません。

英文学の研究も時代とともに変化してきました。「文化専攻」とか「文化研究科」という組織名は、「国際大学」と同様、とっくの昔に陳腐化していますが、文学研究が幅広い文化研究の一部となってきたことは否定できません。また、それによって新しい挑戦の可能性が開かれてきているのも事実です。学問は常に新しくなければ死んでしまいます。高い質を維持しながら、広大な文化研究の領域に踏み込むのは容易なことではありませんが、文学研究が生命を失わないためには無謀な挑戦も必要でしょうし、それは私たち研究者の責務でもあると思います。

会員ニュース

この程、鈴木雅之氏(京都大学教授)の下記論文が *JEGP* に掲載されました。口頭発表やシンポジウムとは異なり、ダブルスタンダードなど期待すべくもない英米の一流専門誌に論文が載ったということはまさに快挙と申せましょう。

Masashi Suzuki, “‘Signal of solemn mourning’: Los / Blake’s Sandals and Ancient Israelite Custom”, *JEGP*, vol.100, no.1, January 2001, 40-56.

本年3月、伊藤正範氏(東北大学英文学研究室助手)と岩田美喜氏(東北大学大学

院生)に東北大学英文学研究室史上初の課程博士号(文学)が授与されることになりました。現在、同研究室の博士課程後期三年次学生は3名おり、また「社会人研究者コース」(博士号取得を目指す現職大学教員のための課程)の「在学生」(勤務先の身分は助教等)もこの四月から3名となり、今後は続々と英文学の課程博士が誕生するものと見込まれます。

お願い

四月になりますと会員の皆様にも種々の異動があることと思われます。勤務先の変更などお早めに事務局までご連絡ください。

試論 Newsletter 原稿募集

本ニューズレターは会員相互の会員相互のコミュニケーションを促進する場といたしたいと思います。住所、勤務先の変更などの異動も掲載する予定です。つきましては、エッセイ、『試論』掲載論文の批評、学術書等の書評等々、どのようなものでもかまいませんので、原稿をお寄せ下さい。長さは自由です。また、写真も掲載可能です。

原稿は随時受け付けますので、編集委員会宛お送り下さい。また、電子メールでの投稿も可能です。下記までお送り下さい

E-mail : Deleted to prevent spam